

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	感情教育待望論（その六）：“なまいき”論：その正視座を求めて
Author(s)	上原, 輝男
Citation	児童の言語生態研究, 12 : 2 - 7
Issue Date	1985-05-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045130
Right	
Relation	



「なまいき」論

その正視座を求めて

上原輝男

一

「なまいき」はよくもわるくもかん（勘か感か観か？）に触る。微笑ましいときもあれば小憎いときもある。それはいづれにしろ、たいして一大事出来などというほどに、それを見る人に決定的興奮を与えたりはしない。時にはその挑発を軽視無視したりすることもあるほどで、それがのっぴきならないとか、強烈な印象を持っているとは誰しも思っていない。

い。むしろ、なくもがなの微細で稀薄な感情作用だぐらいで片付けられているのが、世間一般の通り相場かもしれない。そのためか、改めて「なまいき」について考察されたり語られたりしないのであろう。つまり些末な人間関係におけるとりとめのない気分的なものという差別がある。差別としたのは、「なまいき」論などつい今日の日まで教育論として日の目を見なかったことによる。仮りに、「なまいき」が、主観的で気分的で泡末的で

あったとしても、人間現象ということからは、最も切り棄てがたい成分でさえあるものではなかったか。少くとも、子どもたちにとっては、最初の人間関係は「気に入る」「気に入らない」という気分から始まるように思う。そして、次に来る「気に入らない」反撥の理由づけに、この「なまいき」の語をもつてすることは、誰もが認めるところであろう。人間関係における人間同士の評価の最初の語であるかもしれない。しかも、子どもた

ちにとつては、この「なまいき」という評価を下すだけには終わらない。終わらせないのが、この「なまいき」という成分のように、子どもたちはこれに仕打ちすることを忘れない。いわゆる、「やっつけちゃえ」ということになる。その行動化は年齢、性質によつてちがうが、無行為であつたとしてもそれは未遂だと考えてよい。ここが大人と全くちがうところといえる。かんに触るところまでは同じであろう。そのあとの気分の始末がなんとも本人をゆさぶるものらしい。そして大概は、その気分の始末を、自分の心内で沈静させることをしないで、その気分を起さしめた相手に大なり小なりの仕打ちすることに直結させているから、文字通り始末がつくまで彼等は納まらない。ただし、敢えて仕返しを語を使いたくないのは理由がある。復讐心というのには躊躇せざるを得ない。いや彼等自身が復讐心をかり立てて決起することは、却つて、相手のなまいきを是認することになるのを知っているみたいなのがあつて、いわゆるがまんの状態に入る。もちろん、ここががまんのしどころみたよなことでがまんしているとは思えない。なまいきだと思わせられることが、どうやらがまんの必要とするところのようで、だから、気に入らないのである。つまり、気に入らない、面白くもないのは、彼等にとつて決して動機ではなく結論で

あつて、その結論に至る構成としてなまいきを感じしめられた者はがまんという負担に喘ぐ型式を備えている。聞いてみるがいい。

「どうして君はあの子がそんなに気に入らないの」と。正解は、「がまんさせられるから」である。これが彼等の感情構造に最も近いものと思うのに、この返事は返つて来ない。自分の感情構造の分析ができる年齢ではないといつてしまえばそれまでだが、多くは、なまいきが気に入らないという。そして問うた大人たちもこれで質問の意図に相応する回答だと思つてしまう。気に入らない原因は、相手のなまいきさにある——迷惑なのは相手の方で、相手自身全然身に覚えがない場合だつてある。もし、この論理を正しくするならば、気に入らない原因は、相手がなまいきだと思つてはならない。たとえば孫のなまいきさを見てはならない。たとえば孫のなまいきさを見て嫌悪感情を抱く老人は普通ではない。それがたまらなくかわいいとするとする人もある。

本論は感情分析を目的とするものではないし、それはその専門分野に委ねられるべきである。だが、述べて来た通り、「なまいき」だと思ふそのことが、人間の育成成長の過程

で起り、その対応対処の仕方において、年齢およびその者の精神発達や性質と深いかわりを持つことは人間生態の顕著な特徴であり、大事な教育対象といわねばならない。特に子どもの段階におけるそれは、なまいきだと思わせられという因われと、その虚像打ち壊しの欲求が等質的に、無時間的に起る感情現象といえる。それが対人感情という、おとなにとつても不可解としか言いようのない錯誤蹉跌を自覚する始まりではなかつたらうか。相手を「なまいき」だと思ふそれにどんな裏付けがあるにせよ、それが錯誤、幻想でしかないことは、同じ相手を他人がそうは思わないことがあるによつても、認めねばならないことである。にもかかわらず、人間は主観の優先によつていきいきもし、その目は輝やきを放つ。わたしたちの仕事は、この矛盾をはらんだ対人感情の故に、この正視座を求めなければならぬと思つたのである。

二

詳細は、その調査報告に述べるが①「自分のことを「なまいきだと思つている」②「自分は人から「なまいきだと思われている」③「自分は人から「なまいきだと思われている」と思つている」この意識調査の結果は注目し、まず、「なまいき」は、対人関係における見る見られる意識が濃厚であるという

ことを改めて見直されねばならない。そして、それが人間における事実と思ひ込みとの区別にかかわる問題であるとして判定してみても新しい発見があった。「なまいき」の自覚は、その自覚に先立って「なまいき」だとは他から見られる意識だということを知等知っているように思われる。少し極端な言い方にすぎないが、人間は幼少にして「なまいき」というレッテルを張られるかどうかを人間社会に頭を出したものの最初にうける恐ろしい判定のように思うところから始まり、それは多分に蔓延する流行病のように、年齢発達にもなつて、小学生に襲いかかっているといえようか。そしてそのピークが四年生である。しかし、四年生になると、どの子もなまいきになるということではない。(自分で自分のことをなまいきだと認めている子の比率でいえば、三、四、五、六の各学年ともに男子が変化がなかった)ところが、自分はなまいきだと思われている、あるいは、思われていると思つている、この意識は明瞭に四年生で圧倒的なものとなる。それは男女ともである。このことはまた五年生になると平均化するところを見ると、よほど、四年生は「なまいき」について過敏的に意識化される年代であるといつてよい。さらに、四年生女子に特徴が示され、三年生段階では、自分のことをなまいきだと思うことは男子以下に低かつ

たのが、この学年になると、「そう思われている」の数値と殆んど同率ほどに高くなり、全学年通じて、突出しているのは注目してよい現象である。「そう思われていると思つている」の数値が最も高くなつていゝのも、彼女たちの横顔を覗かせてくれる資料のように思われる。

一口に言つて、小学校で、いわゆる「なまいき」になり易いのは四年生であるといつてよい。そして特に四年生女子は、それが流行病のような現象であるかかわらず、それを持前のように思つてしまふことを示してゐる。

私は今回の調査で、なるほどと思わせられた数々のことがあつた。世間一般的に「なまいき」を定義づけるそれとの隔り、あるいは見落したものに、むしろ「なまいき」に吸収される人間的要因があるとも思われた。たとえば広辞苑には「年齢・地位に比して、物知り顔したり、差出がましくしたり、きざな態度をすること」とあるが、この定義では、「なまいき」を判定する側(長上)の、しかもかんに触る条件を一方的に述べているにすぎない。この説明でわかるのは日本人だけで、外人には、なぜそれが「なまいき」という日本人の心情と重なるのかわからないだろう。このことは、本共同研究の一つ丹野シゲ子のアメリカンスクールの子どもたちの「なまい

き」を参照されたい。決して広辞苑の如き条件が設定された場合にも、彼等社会は日本人的「なまいき」を感じないのである。日本人にしても、広辞苑の説明で、「なまいき」がわかるとするのは、その条件では、かんに触ることの追体験が可能だからではなかつたか。

つまり、頼にさわれるとか羨ましいとか、蔑すみの情とかの基層の上にそれがあることを知つていゝということである。もし、それとのつながりを感じない場合には、「物知り顔することも、差し出がましさも、きざな態度も、それはそれなりの感情でしかないだろう。

とすると、「なまいき」の説明で最も必要なのは、日本人の特性としての感情構造でなければならぬ。既に述べたように、それは特定の言動行為に対して、見る見られるの意識関係において集中し付随している優越心と劣情との交錯が核心といえないだろうか。

こう考えて来ると、三年男、四年女六年女を例外として、他の学年は自分を「なまいき」だと思ふ比率よりも、「なまいき」だと思われている、あるいは、——思われていると思つていゝの比率が高いことの意味がわかる。つまり、見られる意識の方が見る意識よりも高いことにこの感情特徴がなされていると思う。「なまいき」であるかないか、本人が一番知つていゝことであるにもかかわらず、他人の見方を過剰にしたがる。これはコンプ

レックス的に把握させられるものであることを告げている。だから、これを普通だとすると、先に掲げた例外以外は理窟の上では「なまいき」に関する限り、みんな「すなお」ということになる。もちろん、コンプレックス的に把握している方が「すなお」というのだから、元来はこの例外組の「なまいき」標榜者の方が「すなお」だという言い方がなされたりすることも、起つて来る筈だったのである。

だが、今、本論の「なまいき」論は、抑圧と反撥を基層とする精神エリア・マーケティングの試みを始めたのだと言えばよい。

三

「なまいき」が「いき」に到達せざる未熟の段階または状態をいうものであることは、九鬼周造の「いきの構造」と照合してみると納得のいくところである。

九鬼は「いき」の内包的構造として、「媚態」・「意気地」・「諦め」の三契機を示している。そして「媚態」を基調とし、他の二つを民族的歴史的色彩として把え「意気地」は「媚態」の存在性を強調し、その光沢を増し、その角度を鋭くするもの、「諦め」は「媚態」そのものの原本的存在性を開示せしめるものという基本構造を説いた。もとより九鬼は哲学者であつて、後の世の児童学のためにこの「いき論」に人間的成熟過程を併せ考え

てみておこうなどとするとおこることはない。その共時論であることを詰るつもりもないが、わざとこう言ってみるのも、拙論の前提である、「いき」の未成熟を「なまいき」とする論を、思いつきや常識に終らせたくないためである。つまり、子どもは「なまいき」であっても、「いき」ではない。すると、どうしても、「いき」は人間の成長段階において習得されることとしてよいはずであつた。また、かといつて子どもであるから、それを未成熟が当然とする分離論では教育論ではない。「いき」と「なまいき」とはどこかでつながつなければならぬ。それはおそらく「いき」になり切らぬものをなままとしているにちがいない。一体、それはどこをどう見るることによつて判断しているのかを問わねばならない。もはや「年齢や地位に比して」などという適用論とは別のことである。「いき」が「いき」たり得るのは、九鬼がふりほいで見せてくれた構造を整える時だとするなら、「なまいき」に、その構造化の未完成さを指摘することが必要となる。

その具体的な方法として、小学四年生を対象とする「なまいきの認識」という研究授業を試みた。(本誌報告参照) 子どもたち自身の口から出たことばを分析整理することによつて、九鬼の構造と比較しようとしたのである。ただし、子どものさまざまの発言を、わ

れわれの定見でもつて分類整理するのではなく授業記録にもあるように、できるだけ、子どもたちの考えによつてまとめて行かせるようにしたことはいうまでもない。

しかし、この授業に立ち合つた誰もが感じたであろうことは、子どもたちの発言は、そのいづれをとつても九鬼のいう、「いき」の三契機とそれぞれに近い印象を与えられることであつた。もちろん、額面通り、それぞれを「媚態」とするのでも、「意気地」「諦め」とするといふのでもない。この研究授業を待つまでもなくこれらの語を額面通りに、子どもたちの生活の姿に当てはめることは、異和感を免れまい。だからこそ、外側的な社会条件としての年齢や地位の問題があるのだという意見も聞かれるところかもしれない。だが、仮りに、「媚態」を「おもねり」に変え、「意気地」を「さからい」とし、「諦め」を「すね(る)」とすることが許されるなら、子どもたちの発言の全てを收拾できるのは、単なる偶然なのであろうか。私には、「いき」と「なまいき」とが無縁でない証拠がつかめるように思われ、そしてなおかつ、両者を弁別させるメカニズムが、もう少しで知れる気がして来たのである。

九鬼は、うまいことを言う。「垢抜けして(諦め)、張りのある(意気地)、色っぽさへ(媚態)」これが「いき」だといふのである。

こんな子どもは見当たらない。たとえば、大歌舞伎で、『白浪五人男』の稲瀬川勢揃いの場を、歌舞伎役者の御曹子たちで演ずる場合があるが、全て演技は教えられた通り、紛装も全く同じであっても「いき」と感ずる看客はいない。うまく出来て、「なまいき」なのである。しかし、これもいつも「なまいき」とは限らない。九鬼流にいうと、垢抜けできず、張りが損なわれ、しつこくなってしまう。それは何故なのか。同じ目的で、同じ構造を用いながらも、結果が異なるのは何故か。それが年齢だというのは早計である。先の芝居をそれ相応の年齢者が演じて子ども芝居と同じ結果となる場合だってあり得るからである。たゞ先ほど述べたうまく出来て、「なまいき」となるといふのは、改めて考えさせられることではなかったろうか。この場合、看客は「いき」にまとまり上がることを期待していたのではない。むしろ、それを放棄していたといつてよい。しかるに、演技者は、同じ目的への道を歩んで来る。そしてうまく出来た場合は「なまいき」といつていることになる。このうまくといふのは、一体何かというのを問わねばならぬ。判定者は目的を放棄しているのだから「いき」により近いものをうまくと言ったはずはない。もし仮りにそうではないとしたら、「なまいき」の内包する「小類」という成分がうまれる筋道

がわからなくなってしまう。

「なまいき」は「いき」への道の坐折だといわねばならない。少くとも九鬼流解釈の転換が行われている。九鬼はいきの基調を媚態としたが、「なまいき」の基調は「さからい」にある。九鬼が「いき」の基調を媚態とする理由は「一元的な自己が自己に対して異性を措定し、自己と異性ととの間に可能的関係を構成する二元的態度」に「原本的存在性」を見出したからである。うるさくいえば、男女の異性間のみ「いき」の成立条件を求めるのも疑問なしとはせぬが、それはそれ一般論としても、媚態の原本的存在性をいうなら、性的問題以前に、対人感情として「おもねり」を想わないわけにはいかない。いわゆる「甘え」なども媚態の内にはいがないと思う。「甘え」などもたちがこれを基調として「なまいき」現象が成立しているとは考えられない。むしろ、それを捨て、「さからい」に転ずるところがあるから、素志を露出させてしまうのであろう。たゞ、九鬼のいう意気地というにはまだ遙かに遠い生来的な始めての自虐性であるのかもしれない。第三の「諦め」に至っては、子どもにそれが簡単に会得されるものでないことはいうまでもない。しかし、私は既に言及したように、「すね(る)」がそれに最も近い同質のものだと見ている。行為としての「すね(る)」を「甘え」だとす

る一般論は妥当のように思われるが、それよりその心的現象は九鬼のいう「諦め」と同質のものと考えたい。「すね(る)」も「諦め」も偏向、偏執だといつていえないことはないと思うからである。

四

九鬼はいう。「意味体験としての「いき」の理解は、具体的な、事実的な、特殊な「存在会得」でなくてはならない」「一言にしていえば「いき」の研究は「形相的」であってはならない。「解釈的」であるべきはずである」と。拙論にあつても、そうあらうとつとめた。「なまいき」も同じく意識現象と思うからである。

たゞ、つけ加えねばならぬことがある。「いき」論と「なまいき」論との異りは、同じ意識現象論として把握としても、前者は研究者の立場とその対象者の立場とはかなり接近しているに較べ、後者における両者の立場は無関係である。つまり、「いき」実践者はそれなりに「いき」の習練を必要とし、その習練もある種の解釈的に行われるものといえるが、「なまいき」という意識現象は、習練を必要としなければならぬものでない。ましてや、これを解釈的に行うと妙なことにすらなる。たとえば、広辞苑を始め多くの国語辞書が示す「なまいき」の語義は、「年齢・

地位に比して、物知り顔したり差出がましい言動をしたり、きざな態度をすること」とあるのが常で、このままでは、「なまいき」は「なまいき」の判定者によることになってしまふ。つまり、「なまいき」と見なされる行為が、行為者にとって、その意識の有無と関係なくということである。つきつめていうと、「なまいき」なのは、その相手であるよりも、その判定者自身だと言えないことは無い。拙論では、何も国語辞書の不完全さを言い立てることを目的としているわけではない。ただ、このように日常茶飯事的な人間関係意識は不合理的な感情構造を基調として養われて行くことを認めることが生活だということとは違っておきたい。また、それだから、広辞苑を始め多くの辞書は一般通念に従っているのであろう。

そうだとするなら、九鬼の「いき」論で退けられた形相論も「なまいき」論では必要である。「なまいき」の「形相的」研究は、「なまいき」が一般的な、そして皮相的な卑近感情であるだけに彼等に接近するための重要な手段となる。その意味で補説しておきたい。

彼等が「なまいき」を問題にする時、口にする言葉がある。「くせ」である。いかに、彼等が相手とする形相に触覚的であるか知らしめられる用語といえる。それは事実や論理に反していても（反していることの

方が多い）、この語を発することによって、相手の「なりふり」（服装を含む）「持ちもの」「ことばづかい」に執着することのサインのようでもある。

この執着の在り方は決して讚美、推奨の方向ではなされないことが特徴であることはいうまでもない。いわゆるケチをつけたがるのである。心理学者はこれを羨望感や侮蔑心のあらわれというかもしれない。しかし、彼等は本当に羨望しているのであろうか。また侮蔑しているのか、少くとも私は疑ってかかっている。何故か、それは彼等がこの「くせ」に「くせ」を発語する時、この語を発しさえすれば、その対象の「なりふり」（服装を含む）「持ちもの」「ことばづかい」にあまりにも簡単に羨望感や侮蔑心が裏打ちされるからである。それは、坊主憎けりや袈裟まで憎いの初習いであるのかもしれない。異なる点は、子どもたちには袈裟が憎いから坊主が憎いで、この非論理を超越させてくれるものが、「くせ」のくせに」という用語だと心得ている。

どうも、この「くせ」という発想型式の屈折ぶりや歪曲さを、子どもたちは学んでいるのではないか。本来、くせは習性でたとえば、「子どものくせにする」といった場合、「子どものくせのためにする」の意であったかもしれない。つまり、くせするのは子どもの習性がさせているという用法を想定

できないことでもない。「子どものくせに」を現代の普通の用法に従って、あたりさわりなく意識語を与えるとする「子どもの分際で」ぐらいであろうか。しかし、「くせ」は「分際」と意味上の対応はない。しかるに、「分際」の語を選ばしめたのは、「くせに」「に」が「……にもかかわらず」とか「……であるのに」を想わせるからである。ある国語辞書などは、「くせに」を一語として、この訳を与えているが、それでは、「くせ」の語を用いたところが不明である。子どもだけが「癖」に止まっていと考えたわけではあるまい。「癖」に止まってはならない。けれどもその癖から脱出できないのを見るから「くせに……」の発語があったと考えるのはどうであろう。

子どものなまいきぶりを見て、「子どものくせに」と思うことは、決して、「子どもである（分際・存在の意）にもかかわらず」ではなかった。子どものくせとして、その行為がある。もちろんそれを肯定しているわけではない。そうありたくないのにそうする、つまり、くせに見たとすれば、「なまいき」という意識現象は同時に措置意識を伴った人間成長の在りよう、在り方として、日本人の志向を垣間見せたものといえないだろうか。

「なまいき」は日本人にとって、日本人として発達のくせであった。（玉川大学教授）